

ストラクチャー・クラブ・ジャパン（監修）
古田 晃，原 英彦，有田武史，森野禎浩（編）

SHD インターベンション ハンドブック

吉川純一

西宮渡辺心臓・血管センター院長・循環器内科

ストラクチャー・ハート疾患（SHD）とは、別に新しい疾患概念ではない。ただ、それに対するインターベンションが大きな時代の変革の到来を示唆しており、「新語」として登場したものと理解される。疾患でいえば、大動脈弁狭窄や僧帽弁逆流、僧帽弁狭窄、肺動脈弁狭窄、心房中隔欠損を中心とする先天性心疾患などである。これらの疾患群に対するインターベンションの中では、何とんでも大動脈弁狭窄に対するカテーテル治療（TAVI）や僧帽弁逆流に対する MitraClip が鮮烈な印象を与える。

そのインターベンションに対して、わが国で初めてその概念や手技などの臨床を科学的に解説したテキストが登場した。私は心からそれを歓迎する。

本書の序文「はじめに」に森野禎浩先生が私の思うところを記載されている。すなわち、「冠動脈疾患に特化したステント治療は極めて安定した成績が得られ、これ以上の発展が難しいと思えるレベルまで成熟した。その結果としてデバイスの開発会社自体やその領域で働く研究者たちに閉塞感が生まれてきた」と述べ

ておられる。そこに登場したのが SHD インターベンションである。若い有能な心臓病医が海外に渡り、主にヨーロッパ（特にフランス）で経験を積み、SHD インターベンションが日本でも開花しようとしている。森野先生は続けて「そうした若者のエネルギーに触れるにつけ、これからこの新しい領域はわれわれ世代を飛び越え、実質的には彼らが率いていくべきものと確信する」とまで述べておられる。立派である。私も執筆者の幾人かを知っているが、森野先生の言葉に恥じない人々ばかりである。

昨年、私自身も米国のコロンビア大学で TAVI を見学してきた。カテ室に入ると、異様な雰囲気である。とにかくカテ室に人が溢れるぐらい入っていて、いろんな言語が飛び交っている。熱気に溢れている。その中心にいるのが、中国系米国人の経食道心エコー図を操る女性医師であった。カテが始まると、部屋は静かになり、その女性医師と術者の声だけになった。あっという間に TAVI は成功裏に終わり、TAVI が優秀な治療法であることを確信した。さて、SHD インターベンション

には内科医にとって、誠に魅力的であることに間違いない。ただ、冠動脈インターベンションが普及したときに、外科医と内科医の間に、何ともいぬ齟齬が生じたのを忘れてはならない。SHD インターベンションも、外科医と十分に討論の上施行されるべきである。従来、各科の医師が自分の専門領域の視点で治療法を決めてきたように思う。特に大学においてそうである。この点は、われわれ医師すべてが銘記すべきことと思われる。

皆さんには、まずわが国で最初の SHD インターベンションの科学的著作である本書で十分に SHD の診断や病態を学習し、次いで SHD インターベンションに関してしっかりと勉強してほしい。私は本法がインターベンションと心エコーを中心とする画像診断を結ぶ強力な技術であることとも絡み、SHD インターベンションを強力に支持する。

●B5/頁 240/2013 年

定価 本体 6,500 円＋税

[ISBN978-4-260-01708-4]

医学書院 刊